

南 方（ニューギニア）

浜田第二十二連隊第三大隊

馬來、ニューギニアの死闘

島根県 国谷得市

— 広島第五師団は、敵前上陸部隊として有名ですが、国谷さんは当初は中国大陸に駐留していた部隊へ入隊されたのですか。

私は大正九年生まれですので、昭和十六年四月に西部第三部隊（佐伯）に現役入隊。一期の教育後、第二十一連隊に転属し、八月二十六日宇品を出港して中支の呉淞上陸。蘇州附近で清郷工作に従事しました。あまり戦闘はしなかったが、十二月八日大東亜戦争がばっ発した。

楊子江で英国の砲艦がげき沈された音は聞いた。

十二月十九日、呉淞を出発してから「馬來作戦命令」がくだってシンゴラへ上陸、一月十三日先遣部隊が上陸したのち、我々は無血上陸して本隊を追及した。自転車部隊となって馬來半島の中央突破をしたのです。

— 英軍の装備はどうだったのですか。九州や近衛の部隊などと東西併列して南下したわけですか。

近衛は東海岸でしたか、英軍の火力は盛んで、アイルヒタムの戦闘では相当撃たれました。我々の第十一中隊では約一個小隊が全滅したので、指揮班と二個小隊編成となったのだが、あの時は初年兵で初陣、なにがなんだかわからない、とにかく弾が来た。

二百メートル前方で敵が撃っているのを直接みたが、ただ眺めるのではなく、突撃命令で無我夢中、稜線（山

の尾根)にのぼったらうたれた。軽機関銃の射手も皆やられ、私はみぞへおりて助かった。あのままだったらほとんど全滅したろう。

ジョホール水道へはいったのが一月三十日か、ここまでは強引に進んだ。他の中隊も相当やっている。クアラランポールは他の大隊が行ったあとへ行行った。

シンガポール上陸作戦は二月七日、これこそ本当の敵前上陸、ジョホール水道の西側で陽動作戦をして、工兵隊の上陸用鉄舟で早朝に上陸した。そこで、迫撃砲に集中的にやられた。これは忘れられないが、我々の第十一中隊はたいした損害がなかった。

二月九日、テンガー飛行場にはいった。原田連隊長はみぞにはいつていたら、上流からガソリンが流れて来てやけどした。飛行場の油タンクがやられて(敵が爆破?)、朝になったら顔が真っ黒になっていた。敵の飛行機が五機ぐらい目に止まった。夜にはいつて抵抗はなかったが、どこから撃ったかわからぬが、弾は相当きた。

―ブキテマ高地の戦闘は、それから、英軍のパーシバル將軍をみたそうですが。

自転車はジョホール水道まで乗って我々の第三大隊がさきにシンガポール島に上陸して、テンガーまで来たが、その時中隊では戦死はなかった。それからブキテマ高地だ。激戦、苦戦の二月十一日だった。我々の第五師団が正面だったようだ。二月十四日に降伏したわけだが、十七時頃、パーシバル將軍がフォード会社のそばを通過して、シンガポールに向かって約五百メートル行った右側の高地に行った。その時に白旗をかかげて来た。私は第一線に交替するところだったが、敵降伏で一線には出ずに終った。

―歴史的な瞬間をその眼でみたわけですね。その前にあったシンガポール陥落の時の状況を。

その時、敵は余りいなかったのか抵抗はしなかった。終わったら静かになった。攻略までは友軍の砲弾は一昼夜ぐらい集中した。あれぐらい撃てばもう敵は降伏しなければならなかったろう。その時、直径三十センチで長い砲身の臼砲(迫撃砲の大きいのか)を四人でかついで移動していたが、弾丸も長かったように思った。たいした大砲があるなあ、我々がこれまでみたことのない珍しい

もので、威力が大きかった。

二月二十七日、ビントタン島を占領したが、そこにはボーキサイト工場があった。その時には日の丸の旗を持っていない者がいなかったので、自分の旗を立てたが、まだ記念に持っている。第二十一連隊は馬米半島、第十一中隊ビントタン島の警備もした。補充の兵隊がこないで、第十一中隊は二個小隊編成のままだった。

シンゴラ上陸以来約一か年馬來にいたことになる。

ーニューギニアへはいつ出発したのですか、一個師団全部ですか。

ニューギニアへ転戦命令が出て、昭和十七年十二月二日、セレータ軍港を出発したが、「清澄丸」に乗って第二十一連隊の第三大隊がニューギニアに行くことになった。

注（同席した上田健二氏談）

『当時、ソロモン諸島の戦局が悪化し、ガダルカナル島の二個師団救援のため、第五師団の各連隊、歩兵第十一（広島）、四十二（山口）、二十一（浜田）の各第三大隊を抽出して一個連隊を編成、ニューギニアへ第八方面軍直

轄として出発。』

船は仮装巡洋艦で各大隊ごとに「護国」「愛国」「清澄丸」でした。途中はよかったが十二月十三日、四日頃ラバウルへ到着して二日間停泊し、「護国丸」に乗りかえて十二月十五日出港。十九日にマダン島に上陸。その時敵はいなかったが、爆撃で船のなかで相当やられた。その時、我々浜田の第二十一連隊第三大隊長は高橋少佐でした。

十二月三十日、マダン出帆。一月二日アメレイ到着。その下にドコール河がありそこで休んだ。その時、第八方面軍司令官今村中将の命令で、マダンーラエ間の奥地を通る補給路の偵察命令が、我々の高橋大隊にくだったのです。マダンーラエ間は四百キロの距離があり、地図もない山地、ジャングル地帯ですから健脚部隊が編成されました。

私達の第十一中隊誌に編成表がのっていますが、豊原勝朗隊長以下四十八人（警備中は百十八人）。このように各中隊から約五十人、大隊本部と軍の二号無線一個分隊（大森軍曹以下五人）、第三一野戦道路隊第三中隊の一部

を加えて約二百人でした。

食料を一月分と武器弾薬を全部背負ったり、無線器材は現地人（二人）にかつがせて出発したが、結局はほとんど自分で背負わなければならなかった（徴用した原住民は途中で足手まといになったり、逃亡する者が多かった）。

道はやっと一人が通れる程度のジャングル山道で、河があっても橋はない。深く渡れないところは木を切って丸木橋をかけたりした。前半はどこどこに部落があつて道にも迷わなかったが、後半はマーカム河の上流で、五人の戦友が流され水没した。「うらみは深しマーカム河」と今でも忘れられない。

途中、人食い人種の部落にも泊まった。食糧も米がなくなり薯等食べてしのいだが、敵との遭遇よりその方がつらかった。

十八年二月六日、ラエに到着し任務を果たした喜びと、マラリヤ、下痢の重症患者もいたので、やれやれ助かったと皆思っていた。

その時、軍に報告したが、司令官から

「前人未踏の蛮地を堅忍不拔、敢然と突破し、軍の重要作戦路を開拓す、途中陣没の英霊を悼む。かつ隊長以下の長期に亘る絶大なる苦勞を多とす」

という電報を受領したのです。また後日、軍司令官の「賞詞」もいただいで、苦勞もむくわれ、偵察隊の名もあげることが出来ました。

大隊本部でまとめた報告書によれば、四十日間の行軍の結果、山岳地帯を人力での道路建設は困難である。後半の草原地は平坦で、マーカム河をのぞけば容易だろうというものであつたということです。

—ラエでは、ソロモン海に面したところで、ポートモレスビー作戦も失敗したあとですから、もう困難な状況だったでしょう。

〔注〕

『大本営は十八年一月四日、第十八軍に対し「ニューギニア方面においては、すみやかにラエ、サラモア、マダン、ウエワク等の作戦根拠地を増強し、かつスタンレー以北の東部ニューギニアの要地を攻略確保し、爾後主としてポートモレスビー方面に対する作戦を準備す。ブナ

附近にある部隊は状況によりサラモア方面に撤収し、所要の地点を確保すべし」と命令している。

いま思えば、「敵も知らず、味方も知らぬ」状況知らずの「百戦危うし」の命令だった』

ラエでは、潜水艦が食料を積んでくる、ドラム缶詰にして百本ぐらい。それを甲板へロープでしばって潜航してきて、それを荷揚げするのだ。浮上したらドラム缶をしばったロープを切る者と、潜水艦のハッチをあけて、兵器、弾薬などを揚げる者、それを人発で取りに行く者がある。ドラム缶は五個に一個ぐらいあき缶だから沈まない。それに綱をつけて大発で引っ張って帰り陸揚げする。

潜水艦が浮上したら、せいぜい十分〜十五分で、その間に揚陸して潜航していく、綱渡りの行動です。もし空襲や、敵艦にみつかれば大変なことになるから。

ラエには陸海軍の部隊がいた。第二十師団の大邱の第八十連隊など。第七十八連隊は三月ハンサ湾に上陸しているという話なので、我々浜田の第二十一連隊第三大隊の方がニューギニヤにさきに上陸していたわけです。ラ

エでは食糧は不足する。マラリヤと赤痢の患者が続出し、栄養失調がひどくて、そのうえ戦闘により戦死、戦傷病死が多く、兵力は少なくなっていました。

その時、第五十一師団「基」が南文から増援されたが、大部分が輸送途中で海没していた。敵の猛反撃にあって必死に抵抗していたが、我々の大隊に救援を依頼して来た。

大隊は五月十七日、船に乗ってサラモアに着いた。そこにいた部隊へ追及という命令だったようだが、追及もならない。スタンレー山脈へのぼりかけたが、頂上まで行かないうち前の部隊が玉砕したので、降りて来た部隊の兵と一緒にラエに帰った。その兵隊はポートモレスビーの灯がみえるところまで行っただけだった(第五十一師団の中野師団長の下碎命令がでていた)。

ラエに帰ったのは六月十四日だったと思う(第五十一師団のラエ、サラモア作戦は六月から九月まで)。

つづいて、防御のため北東のフィッシュハーヘンへ、第十一中隊長以下二十八人が派遣され、私もその一員だった。中隊の兵力はこんなに減少していたのです。

ところが、フィッシュハーヘンに敵の大軍が九月二十三日に上陸し、防戦したのですが、陸海空の兵力は全然違っていて、とうとう十月三日に占領されてしまいました。

十月二十六日、撤退を開始するが、穴のなかの「もぐら生活」でそとへでられない。一人みつかれば必ず全部やられる。しかし、捕虜になった者はいなかった。白兵戦をやるうとしても、砲撃や爆撃がはげしく、やる前にやられてしまう。その附近は第二十師団の防衛地帯で、第八十連隊の後から第七十九、七十八連隊が行き、十二月まで戦っていることを帰ってから知らされた。

私等は後方への連絡を命ぜられて、さがったが、三十日間、米も食わず歩いた。約十七日間は調味料があったが、あとの二十日は調味料も米もない。草や野性の菓バナナなど食べていたが、最後は栄養失調になってしまった。

当時、体重は四十キロになってしまい、髪の毛は茶色、マラリヤが併発して歩けなくなる。山のなか、ここに「水あり」と記してあるので、そこへいくと、水ぶくれに

なった兵隊が死んでいる。蠅がいっぱいたかっている。悪臭で死人の所在がよくわかった。

米・濠軍が、ニューギニヤ東部からだんだん要地に上陸して、第十八軍の各兵団(第二十、第四十一、第五十一師団)が攻撃圧迫されていたわけですが、配属部隊の第三大隊は、いつごろ脱出できたのですか。

十一月十二日か十四日ごろナブリバというところへ到着し、大発に乗ってマダンへいきました。そこからウエワクへ、つづいて、駆逐艦三隻ぐらいに護衛された輸送船(団)に乗りパラオへ出帆しました。ウエワクまでは途中魚雷艇におそわれ、海へ飛び込んだりした。珊瑚礁で通れなくなったりしたこともあったが、さいわいに犠牲者はでなかった。

パラオがみえるようになった時、二隻船団の一隻が魚雷でやられ撃沈されるのを見たが、私のは助かった。

十一月二十六日、パラオに上陸したが、その時、第一中隊は中隊長以下十七人になっていました。そのうち、栄養失調とマラリヤで三人に入院命令が出て、私は

十二月二十八日、パラオの瑞穂の兵站病院に入院させられました。

病院といっても床は木の丸太をならべ、その上に枯草を敷いて寝ていた。四十度ぐらいの高熱が二十日間ぐらいつづいたのち、熱はさがったが院長診断で「内地へ帰れ」といわれ、船に乗った。

初めはマニラへ行く予定だったが、十二月三十日にパラオ港を出て、昭和十九年一月十一日宇品港へ入港しました。

宇品から広島陸軍病院第二分院に転送され、原隊復帰して、八月三十一日復隊しました。

再召集は昭和二十年八月十五日鳥取の部隊へはいったが、同日終戦、即日召集解除となったのです。

東部ニューギニア

第七十九連隊

ジャングルの苦闘

島根県 上田 健二

―上田さんは何年徴集で何処へ入隊したのですか。
私のニューギニアへ出発するまでの略歴は

十六年十二月十日 朝鮮第四十三部隊に入隊。

(歩兵第七十四連隊)

十七年三月一日 幹部候補生に採用。

(志願者四百人・採用五十五人)

十七年四月一日 乙種幹部候補生に決定。

(甲種二十五人・乙種三十人)

十七年五月一日〜十七年十一月三十日

福地山教育隊に入隊。

十七年十二月五日 朝鮮第二十二部隊に転属。

(歩兵第七十八連隊)